



蘇書長子知微集考
 卷五



在末業平朝臣

月やあゝぬまきやむの事きりぬまきやむの事
○今夜コへ来テ居テ見ル月ガモトノ去年ノ月デハナイカサ
月ハツリ去年ノトホリノ月ガヤ春ノケニキカモトノ去年ノ
春ノケニキカモトノ去年ノトホリノ月ガヤ春ノケニキカモトノ去年ノ
トモヤツリモトノ去年ノトホリノ月ガヤ春ノケニキカモトノ去年ノ
タフハナイニタオシガ身スツカハ去年ノトモ身デアリナカ
ラ去年達々人ニアハレテ其時トハ大キニチカウタフワイノ
サテヨノ去年春ガ志シ二ツのやまやハの事あり

さく續白のトハハレヤうももわぬこころ子といふ事
よふをうらむ其やうめたるももも月やあゝぬまきやむ
あゝぬ月とまきやむの事きりぬまきやむの事
えうすうこに孔朝臣はまハハ何まきやむ
このやまやうらむ事形ノ神村おまきとよまきやむ
の説ごまきやむの事きりぬまきやむの事
子々子々すよめく語乃のまきやむの事
まきやむの事

歌一巻

後末業平朝臣

コト
鳥のうらみのあは
候ほどおとつせん
事あり

アオソノフヂヤ 上りのとて海材れどー

子秋のうら海まじりあはるあは子やとつんこまはるれ
なるまよよのあそのまはるあはるれとつんこまはるれ

川の流れはつらつらもつりあはるこはるたのむとあはるれ

セメテカリウメニカヨツトケ来テウレヌ入ラ教ニセメテ居ル

ワレサアニラナアカヌ心チヤ

あひのうらあはるまはるれまはる川まはるあはるめてあはるあはる

ワレガ中ハ水チイトミ水無流川やウチモツテ 逢フガサレバ

タビ多クイコトコソミサレ 水ニサツテ流イヤウチハナイ中チヤニ

ナニレニ未カケテ流ウレハハヒツメタフヤラ

鴨の羽うまはる
子持格鴨時とつん
とつんあはるあはる
れあはるあはる
もつん

の鴨乃もねつきあはるあはるあはるあはるあはるあはる

鴨ニ鴨ハ子ガキトミテ 鴨ガキウチウチウチウチウチウチウチウチウチ

君カヨヌ夜ハソウ鴨ハ子ガキホトシウチウチウチウチウチウチウチウチ

身ヲツイテナデキス 此のあはる下白のまはるあはるあはるあはる

子ノあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

一モウハキレテシメウチヤラ 此コロハイツカウ三オトツレモセメ

アガ種まはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

あはるあはるあはる
あはるあはるあはる
あはるあはるあはる
あはるあはるあはる

こゝろのこれよあ
うらな

まきまき
ごダソノ時節デモナイニハヤウラガ袖へ時雨の引名 君が心三秋
ガキタカシラヌソビハ袖タタハ涙ノちぢみヤ

山の井れあまきんもあまぬま氣うらぬ人乃見やらん

ワビ山井ノヤウニ浅イ心デハナイドウ云フテ君ハイツテモ 影カ

リ見エテヨリツカシヤヌイヤラ ぢぢりぢぢと云いづぶふ

まぢあれうけよあふげのこひりささめものさめあり

こゝろをさなねさめさめと逢ふとのこころをさめおとあひせバ

此ヤウニキツウ逢キナリニクイモカヤトイラトウカラシタナリ

忘草ノ名ヲトツテオカウデアツタモノヲソシタラシラ 藤テ

いんてこ節をラヌヒヤウモウモ

こゝろをさめあひのまはハ高き草をけすまやあひいぢぢらん

ナホ高クハツテ寐テモさそモ逢ウト見夜チチハカノ人カワ

ニラ忘女ワス草ガ 妻乃へデハエシガカカトヌ

妻よたふあふてのこころありけはこゝろをさめいよぬぬ人やこゝろを

妻ニサアハレヌヤウニチテキタハ口ガモクモテ妻のこゝろをさめ

ハ君ガコレヲ忘テ心ガカハヌカ 縁村ヨリ ちぢぢぢ

いんげのはし

こゝろをさめあふてのこころありけはこゝろをさめいよぬぬ人やこゝろを

このちぢぢぢぢ
いんげん

登仁明天皇の五
 子母、更云三國氏
 あり、その母、深朝
 氏の姓、その母、
 その母、その母、
 ようて、その母、
 つれ、その母、
 強、その母、
 親、その母、
 ある、その母、
 信、その母、
 子、その母、

唐の事、遠く、所、ヤト、マテ、居、ニ、ソ、シ、モ、タ、ニ、タ、バ、
 ツ、カ、ト、カ、ク、唐、ヨ、リ、モ、ト、コ、ヨ、リ、モ、ま、い、ハ、
 中、テ、サ、サ、ル、ワ、イ、

まごのつむぎ

ひ、う、の、こ、あ、め、ふ、も、れ、つ、あ、れ、ハ、
 長、西、カ、ニ、バ、
 ト、リ、物、心、
 ハ、人、マ、志、
 偽、正、画、服、

心、ツ、ヨ、ウ、テ、集、モ、セ、ヌ、人、ヲ、ク、ル、カ、
 待、テ、居、タ、マ、ニ、ツ、イ、月、日、カ、タ、
 一、

於、ま、の、お、ま、り、
 出、が、あ、ら、ん

今、こ、え、と、い、ひ、て、お、れ、
 千、カ、イ、ウ、キ、ニ、又、来、ウ、上、テ、
 一、ツ、カ、リ、必、ト、ウ、ラ、
 テ、ハ、ツ、カ、リ、サ、展、

よまごのつむぎ

こ、あ、め、ふ、も、れ、つ、あ、れ、
 の、ま、ご、の、つ、む、ぎ、

此のまゝにうらまへ
のとききこむ心あり
根はまきつゝハミ
とあり

人などふんこのまゝあはれむきほのまおちりもれれ
○人ヲ名フ心ガホノ兼ナハコソ 風ノクニシタガウテ 千リミタレ
モセウシレ ロレガソナラフ心ハ 木ノ兼ノ風ニナリ乱レルヤウチ
カルズレイ心デハナケバ 何事ガチツタトモナノスナニカ
ハラウシイ

ありひらの朝はまのありはぬがむけのす
こころをうらむそとあまきくあぶりのありひ
ごひらまてあまうハうらのこころをまじよと
てつらと〜ん

あまきこむ心あり
のとききこむ心あり
根はまきつゝハミ
とあり

あまきこむ心あり
のとききこむ心あり
根はまきつゝハミ
とあり

あまきこむ心ありのよそも人のありはまきこむ心あり
○雲ニ垂ハ目ニ見エケレ遠イヨソノモノナガ オモチカ
ゴロハテソドツレテ 正目ハ出カワツテ サエカ目ニ見エトナカラ
ヨクシツナツテマア 子カラ夜ルオ上リナツテ下サル
ハナイサテモクキコエセヌサレカカナ ニク
ありひらの朝は

あまきこむ心ありのよそも人のありはまきこむ心あり
○ワレヲ雨ニ交トラレタガ ナルホトヨイタトハチヤ 雲ニ垂ノヤ
ウニワレガ イタリキタリハツカリシテヌヨトメスニタテルハ

宇千集三の夕
のちやまの白
こころあきく
あ

さるはよる
のあすめし
り

はれもきくありあ人のまはれあぞ秋より先の紅葉とら

次才にしち子ツテマノ相ガサ秋ヨリサキノ紅葉チマ

イナゼトコトニハカタエテオイタガサツテカハツテとマタ

ワサ 木ノ葉ノ色ノヤウニ

ヒヤウキノシセウ
こころあきくありあ人のまはれあぞ秋より先の紅葉とら

シラキキチカラ
のあすめしち子ツテマノ相ガサ秋ヨリサキノ紅葉チマ

よきそつふくしきき 多場

あぞのまはれとあすめしち子ツテマノ相ガサ秋ヨリサキノ紅葉チマ

イナゼトコトニハカタエテオイタガサツテカハツテとマタ

イオマヘヨリ先ハツレハシデノ山ハコエミツト存ニテソノ葉ニテ
糸デ又テサモトツテあきくマタ

あひあきりるる人のやうやくらまのまはれあぞ秋より先の紅葉とら
るあひあきりるる人のやうやくらまのまはれあぞ秋より先の紅葉とら
ハきりるるあ こそあきりるるあね

時色てツレれあぞのまはれあぞ秋より先の紅葉とら
秋モ過テ冬ガレテツツ野ハ大ヨツテモエル物チヤガ

テウドツ身イデ年ガイテオハ心カレニオタワタ
今デハモウシヤウナウミカサモエスツイナツレテはあ

やゆらまの葉
こころあきく
あ

あ

モ此通りニテニテゴリビテ下サリトセ

そのおひひととろおひひととろおひひととろ
おえんらととろおえんらととろ

いせ

左折ニハ未の向折
べきとのと

冬折の残とてワガ身とておひひととろおえんらととろ
人ニ見スニテシタソガオモ冬枯クノ野ニヤトシテチラア
ニテ焼ヤウニ今ウラヒガモテケレバソレモ又春ニウツタラ
芽カニテアヲウトヤラテ 春ヲ待タウモテヲ 口ニモウア
冬折ノ野トチガウテ 冬ニテ冬トテモ芽ノデリおこモテ

冬折ノ野トチガウテ 冬ニテ冬トテモ芽ノデリおこモテ

歌一ノ

よもいへん

うくくひひととろ
るくくひひととろ
縁の初め

あの地北清くうき身とておひひととろおえんらととろ
水泳キテヤウニキエルホドウイ 水泳キテヤトシテチラ
イツモカウハカリテモアルニイトマタホラれとてニテヤシラ
ア浦モセズニカウニテ居ルハサシクニチラアカヌ水心カチ

。チ折ニチ折ノ人トておひひの
縁までおひひととろととろ

よもいへん

ミカセ川有て初めおひひととろおひひととろおひひととろ

水を取川ニ有テ流レルガオオトソワカ中ラトク切テ
シウタト名ハウナレ水チイト名ノ多キ流川サヤツリ
水カ別テ流レルナバ赤中ニ絶多ウナドヤツリ縁分ツテ
タキリハセヌイモアラウツチ 四のウツ中とよひ
づまどイササとらるるぶざーのどとよ川のあ極と
うねとらるるや

又後ね

よの川よや入るつめめやうてしてハ忘れ
人シライハ一ハデゼガナイ人ニソウカラウツレオクテカ

タニテオイヤハイウツモスヒイトヨ 今やくガキ

川の縁あり。

よと人あす

ぼ中れ人のあやうぶあめのもつらひやすきとを有る

世中久心よモノハテウ花流ノ色テカカリヌイ地テサ

ヲルワイ

らこそとてあをれほざらうあともとらうあや

ウタテヤ人ヲあぶナ心ガニタイヤツガイコチカラるハズ

サキ心カカモ惜サラウカイ人心カルガワライモコチカラ

あやうぶあめのもつらひやすきとを有る
世中久心よモノハテウ花流ノ色テカカリヌイ地テサ

らこそとてあをれほざらうあともとらうあや
ウタテヤ人ヲあぶナ心ガニタイヤツガイコチカラるハズ

あゝんま女のまゝ
見せてありれま
まゝくちま
のまゝえま
附まおま
まのまゝ

おのふともれあん人まのまゝせんあぶらちのまゝ

○イカホト残念なまままモ 心かかハツテトホイテ子人ま

ナントセゾトウモセウツガナイ スレヤダヌタヌウキ

ウ教文まヤトサウラ居ヤウ

よまゝ

まゝまゝあれまゝあまのまゝあまのまゝあまのまゝ

○モウコギリトまラテ 君かトホイテまヌヤウニツタナラ

コチノ庭ままバロレトリガヌテ 志くマイウトまま

ステアラツカ

おのめはれおのめ

忘れまのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

○人まラ忘レタマヌレまモ枯テ 毛レヌモトノヤウニヌテク

モアウカトまハハワラワスレタツトイ人心へ罪がオケヨイニ

トまハレ 罪まヌマイまが枯レモノオバソツマワス

忘れまのまゝまゝ

寛平の村の風まままゝまゝまゝまゝまゝまゝ

うままま

ままま

まままままままままままままままままま

おのまままま
ままままま
まままま
まままま

○ワスレ字ト云物ハ何ヲ女子ニレテハエルユトカト云クガソク女子ハ
ツレナイ人心ヲモイノテツ上ノ心カラレテ人ヲ忘ルモヤ
ヤヤ

歌一八

秋のゆたはなてふもみ子あけお何とてうらみのあはれん
○一ツガキラウテモウイ子ト云テカキタフモナイニ人ハヤ
ウニ遠クイテ来ヌハ何ヲウイトクテクヤヤ
樹の緑此初あり

きのほく心記

初丁の情こそはまよれ中の人乃あまの秋くうけはまを

○人心秋がウイユエニワハ空ヲワカ初丁ハウニ泣テサケルワイ
よまゝ人志ます

あつれともうしとこ抱とあやときあはれう涙のほろあまらん

○物ヲアレト名フハモトト名フハモトカク涙ガホロくホロくホロ
ホロトコボルナゼニハヤウニ涙ガイソガシウコボレルコヤ

餘材打受ともあはれん
身とてうくゆゆのあまきまぬあはれん

○キツウ身ヲウイト名フニ命モ消エサウニ名ハレルケレソ
あはれん

いんきまハいとあま
きあるといとも
うとこあけい
ア
浮換妻の比れま
厚子あまふし不
老のあまい
まこあま
ロク
いんきまハいとあま
林ハれんあま
あはれん

おきねは秋風と
のちよきさう

○ 茸赤カラ空ヲサレテツトトニテユク雁ノダブトモと云ナレヤ
之ニダブトモフスイトホイトテユクワガオハア カオレイフ
トギヤ

あぢれつものづるよりとまのたれん乃秋子あぢれび

○ 時雨がりくくニテ木葉ノ色ノカハツテ多秋ノコロハツライモノ
ギヤガクシヨリハニテオトク行ハル人心ノ秋ニマウオガ
ナホノマ

秋風のふきと吹ぬるむさし群ハまぶくまきまの毛かひうらう

○ 秋風ガキサスミアノ廣イ武蔵群ニモ群ハサツハリニナ

そく色ガ灰ツテ枯ワイー人心モツーホリサ 餘村々ツー

小町

秋風あぢれつものづるよりとまのたれん乃秋子あぢれび

○ 秋ノ大風ニテ指ハサキニクナモノギヤ 百姓ノ秋ニテ居ル田ガ

サマリニヒニルワガ甲モテウノニナモノデ人ノ秋風ガツイテ
おきねフタトガ皆ムカエタトモハサ カサレイワイ

たのむと田の裏子よせうりさて呼の向マオオむか
くしつぎきくらんはるづす秋子ハ秋風子あぢれび

つふらうむあしつふあのとつらう

おきねは秋風と
のちよきさう

よふぐの事の中
三善の事の中
三善の事の中
三善の事の中
三善の事の中
三善の事の中
三善の事の中
三善の事の中
三善の事の中
三善の事の中

おののさざん

おののさざん

○上 うちまてちちて

トカナ

よこへん

おののさざん

○おののさざん

おののさざん

おののさざん

おののさざん

おののさざん

○おののさざん

おののさざん

おののさざん

おののさざん

おののさざん

○おののさざん

おののさざん

おののさざん

おののさざん

その幸あ世の中を
あふらうくは世
の中をこころとあり
とすしるまの世ま
やびるれう

まのつゝやま

まのつゝやまの世の中を

○世中スバツタイ皆受トサユウフヤワイソレニ今テ六 正

正まのつゝやまの世の中を

あひまはるる人のまをめぐりしるる附子あめ

まのつゝやま

ぬまうちあひるるまのつゝやまの世の中を

○子ムツテ居ルウチ見ルまのつゝやまの世の中を

デハナイカツタイはまのつゝやまの世の中を

子ヤ

あひまはるる人のまをめぐりしるる附子あめ

流とせえ測とあひるるまのつゝやまの世の中を

○川流ヲニガテテセキトムバ流ニテユク水デモ測ニツテトル

モクヤワイソレニ死テユク人ヲセキトルニガテニハナイ

あひまはるる人のまをめぐりしるる附子あめ

くりまはるる附子あめ

あひま

あひまはるる人のまをめぐりしるる附子あめ

この世の中を
あひるるまの
世の中をこころとあり
とすしるまの世ま
やびるれう

あひまはるる人のまをめぐりしるる附子あめ

雪風のころもあざむく
くわもふきよめ
人あそく下界

○人死ヌバテウダ流シテ子川ノ水トホリテニ交ヒ返ワテルト
云フハナイ 比交ノ事サヤルカテ落シテ持量ヤシシタ
ワシモ昨日前ニカテ落シシタサキハ早ク死ニシタラヨカツタ
ニカウシテ生テラリテスガ悔シウテ 奇カヘシ^{ヤチヨバ}カチシイハ
比交ノ事^{四五}デゴサリテスサキハ死ニシタナラコシナコトハウケタ
カテイモ 餘村お夢さふぶつてさかす。三の句れ
むのどと。結句のふきよめとお思へて味あづく。さき
二の句れとのとあづく切く。ハ子交うあう。きん
づけく。後^{ヨム}べ。ハ子交を。あう。きん。けり。悔^{シヤ}子
あましたる。初子ハあづく

初子ハあづく
初子ハあづく
初子ハあづく

はらりゆき

初集のころもあざむく
二の句れあれど
とあうてまのあざ
集まのあれとせ
あり

○赤子モ明日シレヌトハ下^トクガ暮テ明日ニテラヌ今日ノ年ハ
アオトカウシテ跡ヲ居ル人死ニダガ非悲シイヨ

たぐえぬ

○時節モアラシク秋時入ノ死ナウフカヤ秋ハモノ年ニシテ時

初子のころもあざむく
もあざむきよめ
はらり

妻のあつたこと
あつた

わがひうづりなるといふはあつたこと

うづりな

○妻の手で九服の袖に雲やカサテ 涙がたぎる

雨のウツリス

妻の親のウツリス

わがひうづりなるといふはあつたこと
あつた

うづりな

わがひうづりなるといふはあつたこと

○私モウハヤ只今ハ山ノ道及ビテ 山三任ハシメテ 泣テバ

リラリエバ 彼ノ袖ノタキエヒモゴリニヒス

涙のうづりなるといふはあつたこと

うづりな

○アノ池ノ水ハウツタ花ノ散リト見エテハ 崩海ナリ

父君ノ顔ガアリク上アヲガムヤウニハルナカサ

あつたことわがひうづりなるといふはあつたこと

あつたことわがひうづりなるといふはあつたこと

あつたことわがひうづりなるといふはあつたこと

浄土の日記
カハサヒト
嘉祥三年三月廿二
日子仁明天皇山明
あつた

浮とつひ或は沈とつひある。まふびびくふかき
系子おれ子沈シヅムとつるをこころにあらは借カりてつるを
言ぬ。ふ沈ととあがくこころとまふ。

海軍のふかどのひまは日ある

文屋やすむく

弟あつき家のたふし教へてつるのふれはふあふあ
○サチウト照ル日中ノ日ガ体イ度ニカクシテニカニ書ウカ
文ヤウニ 先帝様ハニ文ガカリノ年デ 像ニ崩ルナツテ
弟ノカイ海軍山ノ谷ヘマケテツカホトナウハ一周忌ニ

カテ今日ハツ去年ノ崩ルノ日デナイカイゴアア、ツ時ハ
悲レイゴデアツカ去年ノカデアツタ下及ハ又ソノ時ノカ
ミハレテサモクカナレトゴヤ

海軍のこころに沈シヅムる人あつてつるひるあれ
はつるあつてつるを深書ふあつてつるまふまふ
世もあつてつるしてつるの山子のあつてつる
らあつてつるその又つるつるあつてつる
ぎつてあつてつるあつてつるあつてつる
らとあつてつる

信正通解

海軍のこころに沈シヅムる人あつてつるひるあれ
はつるあつてつるを深書ふあつてつるまふまふ
世もあつてつるしてつるの山子のあつてつる
らあつてつるその又つるつるあつてつる
ぎつてあつてつるあつてつるあつてつる
らとあつてつる

羽根よ
朝なれば何とぞ
しとあやし人々を
もばはさむとぞ
らめ

時島カナズ 去年君六十レ夕時節 ぞか オチヤルアイ

扱とてあきりありし^{ヤロク}子やうやく^{ヤロク}急き死ぬまう時

おのう急るも人死ありしはれ^{ヤロク}その急とぞ

よあき まのもちめき

おまも人そあまふふま^{ヤロク}いづれとてまふ急^{ヤロク}との急

○ 扱美キツタ早ウチツテカナイ物ガヤガソヨリサキへ立又人カ

サカチウツタロイ^{ヤロク}無事ナ世中ギヤ 急ト人トドキラ

ガサキへアタチツテ急^{ヤロク}レウイラウトセフ冬^{ヤロク}はヤウラヨリサキ

へ立又人カアタチツテ急^{ヤロク}レカウヤトハサラク^{ヤロク}急ニモあハナゾコ

そのこころは
経るあやう

若家文子お大長
葉いかり 又乃
年の名院ハカ
とらゆり足らう

トナヤ

わすれ^{ヤロク}こころ^{ヤロク}少き人の家此扱系とてあき

ついでま

そまもゆりのこころもあ人も極々人の急を急^{ヤロク}き

○ 扱美キツタ早ウチツテカナイ物ガヤガソヨリサキへ立又人カ

サカチウツタロイ^{ヤロク}無事ナ世中ギヤ 急ト人トドキラ

ガサキへアタチツテ急^{ヤロク}レウイラウトセフ冬^{ヤロク}はヤウラヨリサキ

へ立又人カアタチツテ急^{ヤロク}レカウヤトハサラク^{ヤロク}急ニモあハナゾコ

乃家子あうらう^{ヤロク}く宵まふ急^{ヤロク}不^{ヤロク}あ^{ヤロク}の^{ヤロク}あ^{ヤロク}と^{ヤロク}

抄巻集王やまひ
て人多くを影
し年かま人と辨
らぬおをくおまは
とてくすけま
ミ子人の命を
おとすはまひ
と子孫をい

ハロガ金テコサルイモウカウナス今モレトセ又

こまゆりおんこまゆり

後東一まゆり

おとやぶらぬおとやぶらぬおとやぶらぬ

ヒゴロオハカナイ物ホマハセセフタヤラハカナイハ

ガカリテハナイサウフタオガオモオウウエモオカ

ト云ガカリテコソアレ今消ウモレ子バオトオモカハル

イニ

やまひしてよやくありふらま

うねくは海無おのま
と万葉まき
元徳元年五月廿八
日本書紀のま
幸はく三代実統
子孫

ありひのの朝臣

はひおゆくとくはねてまらど暇ひらあとおおらふりし

死ニテユク道ハタシテモイヌハセヒエウ及子ヤ上ユハカ

アテ居テヨミガテニシテ居タケドモソシテモ此ヤガニモウ

明日カウフトハ必ハナシダニハヤ時節ガキタツテ死ナ

又フカヤ

らねらしめおとやぶらぬおとやぶらぬおとやぶらぬ

おひのあ子あひあいで侍る人とおとやぶらぬ

おありらるるあかりあかりあかりあかりあかりあかり

御程のなごころを
甲斐子よまを
よめ

母子又せましくめでんまつけゆりなるあ
あういしはあけをほ

うらまはれはけりひぢとぞあゆみふくまぬくでのくぎりあうたう

甲斐必へ来ル此様ヲソレカリソナ性来ガヤトサ存シテ

出テ来リシレガソノ時ガモハヤコノ世ノイトゴヒノ門出テゴサ

リマシタロイナ

頭書古今和歌集巻之十六

古今和歌集

